

【実践報告】

「障害児保育」の体験授業を実践して

嶋田貞子*

Practice of experience-based classes on childcare for the disabled SHIMADA Sadako

近年、保育現場では「気になる子」や「支援、援助を必要とする子」などが多く在園し、保育者は対応方法に苦慮しているという話を聞くようになった。現在の保育現場で働くためには「障害」についての知識、理解が必要不可欠であると考えられる。そこで、「障害児保育」の授業では、将来保育者になる学生達に、さまざまな障害についての理解を深めてもらうために、事例紹介、写真やDVD視聴などの視覚教材を取り入れながら授業を実施してきた。また、それに加えて、本年度、教職員の方々と地域の社会福祉協議会の協力により、「車椅子体験(肢体不自由・身体障害)」や「白杖体験(視覚障害)」、「高齢者疑似(老眼・視野狭窄、聴覚障害、身体障害)体験」の用具を借用して体験授業を実施することができた。

今回は授業内での疑似体験を通して、その体験が「障害」や「障害児保育」の理解にどのような影響を及ぼしているのか、その結果を報告する。

さらに、アンケート調査の結果と現状を踏まえ、今後どのように授業を進めていけば学生の理解をより深め実践力の向上に繋げていけるのかを考え授業方法の改善に役立てていく。

キーワード：障害理解， 障害児・者理解， 車椅子・白杖， 体験授業， アンケート調査

I. はじめに

近年、保育現場では「気になる子」や「支援、援助を必要とする子」などが多く在園し、対応方法に苦慮しているという多くの保育者の話を聞くようになった。3年前より、本校で「障害児保育」を担当させて頂いているが、将来、保育者になる学生達に、さまざまな障害について理解を深めるよう学習するために、事例紹介、写真やDVD視聴などの視覚教材を取り入れながら授業を実施してきた。

また、本校では教職員の方々と地域の社会福祉協議会のご協力のもと、「車椅子体験」が実施されていた。「車椅子体験(肢体不自由・身体

障害)」加えて「白杖体験(視覚障害)」、今年はさらに「高齢者疑似(老眼・視野狭窄、聴覚障害、身体障害)体験」の用具を借用しての体験も実施することができた。昨年度までは、体験授業後、学生に感想を提出してもらい好評を得てはいたが、実際の体験が「障害」や「障害児保育」、「障害児・者」の理解に本当に役立っているのかを検証していなかった。そこで、今回は授業内での疑似体験を通して、その体験が「障害」や「障害児保育」の理解にどのような影響を及ぼしているのか、その結果をまとめて報告する。

*越谷保育専門学校非常勤講師（東京純心大学現代文化学部専任講師）

さらに、アンケート調査の結果と現状を踏まえて、今後どのように授業を進めていったら学生の障害理解と保育実践に繋がるのか、授業方法の改善に役立てたい。

II. 問題と目的

授業の中で、障害の種別には視覚障害、聴覚障害、言語障害、知的障害、肢体不自由・身体障害、重度・重複障害、病弱・虚弱、発達障害等、学習してきた。身近に障害のある方がいる、あるいは実習園や施設等での障害のある方との関わりの経験がある学生の場合は、障害特性について比較的理解しやすいと考えられる。だが、障害のある方と出会う経験のない多数の学生にとっては、各障害に関する理解を深めることは難しいのではないと思われる。そこで、視覚を通したDVDの導入や保育現場での事例を挙げて具体的に説明するよう努めてきた。

しかし、それだけでは理解を深めるのに不十分であることは否めなかった。知識としてのさまざまな障害特性を学習することは保育者としての基本であるが、知識を学習しただけでは障害児・者の生活上の困り感や大変さ、どのような対応・支援方法が必要であるか、という具体的な事まで実感することは難しい。そこで、障害や障害児・者の生活のしづらさやどんな対応・支援が必要なのか等の理解を深めるために、車椅子・白杖を始めとした疑似体験学習を実施するに至った。この体験を通して、障害に関する学びと障害児・者の方々への理解を深め、援助方法を考えるための一助になればと体験授業を実施した。

III. 実践の方法

車椅子や白杖、高齢者(視野・聴覚・身体不自由)の疑似体験をするため、地区の社会福祉

協議会から用具を拝借・利用して授業内で実施した。昨年度までは、1コマ1クラスずつの体験であったので、車椅子体験と白杖体験のみであったが、本年は2クラスで設定されていたため、高齢者疑似体験セットも追加し、教室も2部屋利用して実践した。本来なら体験実習は戸外で実施した方がより障害児・者の理解につながると思われたが、安全確保の問題や1コマ90分以内で実施するための時間制限、用具の賃貸時間制限等を考え室内での実施ということになった。

1) 実施対象

越谷保育専門学校の2年生70名(内6名欠席)。対象者は体験授業までに、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由(身体障害)に関する講義を3回(各1コマずつ)受講済である。

2) 実施期間

2015年6月30日(火) 各クラスの授業内
1限(9:15~10:45)・2限(10:55~12:25)
体験実施後、感想文を提出してもらった。

3) 実施場所

- (1) 車椅子体験…リズム室(学校地下)
- (2) 白杖体験…リズム室と階段
- (3) 高齢者体験…201教室と廊下・階段

4) 体験学習用具

- (1) 車椅子…4台
- (2) 白杖…6本
- (3) 高齢者疑似体験セット…4体
- (4) イヤーディフェンダー…4個

5) 各体験実施方法

(1) 車椅子体験

① 実施方法

車椅子体験者は2～3人で1組となり、1名は肢体不自由(身体障害)役として、1名は援助者として車椅子を押す役割を担った。役割は交替して体験した。上記の役割ごとの体験が終了した後は、各自1名ずつで車椅子に乗って自分自身で移動を試みる体験も実施した。

② 実施内容

学校のリズム室(地下)において、以下のa)～d)作業を2～3人で1組、あるいは1人で実施した。

- a)車椅子のセッティング、b)車椅子を長縄・マット(障害物)の上に押す、c)人形(疑似障害物)の周りを回って戻る、d)ストッパーをかけ元の位置に戻す。

(2) 白杖体験

① 実施方法

学校のリズム室(地下)と階段(地下～1階)で2～3人で1組となり実施した。

② 実施内容

2～3人で1組となり、目を閉じて視覚障害疑似体験をする人と、援助者として、以下のa)～d)を体験する。a)白杖を持ち平均台を歩く、b)白杖を利用して廊下を歩く、c)白杖を使用して階段の昇降をする、d)援助者は白杖を使用する人に声かけをし、手を取って援助する。

(3) 高齢者・聴覚障害疑似体験

① 実施方法

201教室において2～3人で1組となり、疑似体験装具を使用して実施した。高齢者の疑似体験ではあるが、視覚・視野狭窄・老眼、聴覚障害、運動機能の

難しさ等、障害児・者の理解にも通じるところが多いと考えられる。

② 疑似体験装具

高齢者(障害)疑似体験には以下のa)～c)の3種類の装具を用いた。同時に、d)聴覚障害疑似体験の用具も使用した。視覚シュミレーションゴーグル(視覚障害・視野狭窄・老眼等)、b)関節硬縮シュミレーター・チョッキ、c)杖、d)聴覚シュミレーションイヤードیفENDER、等である。

③ 実施内容

②の高齢者疑似体験装具と聴覚障害用装具を装着し、2～3人で1組になり、高齢者役と援助者役、観察者役と役割分担し廊下や階段を歩行する。役割は随時交替して体験する。

6) アンケート調査実施方法

2015年10月6日(火) 各クラスの授業内においてアンケート調査用紙を用いて実施した。質問項目は5項目で選択式と自由記述式のものがある。1.体験が障害理解にどの程度役立ったか。2.1を選択した具体的な理由について。3.体験学習の中で印象深い体験を2項目選択。4.3を選択した具体的な理由について。5.今後の体験学習(DVD 視聴等も含めて)の必要性について。以上、5項目について調査した。

(体験64名中、56名回答、回答率87.5%)

7) 倫理的配慮

調査協力にあたっては、提出された学生の感想文やアンケート調査の結果を資料として用いることを説明し、調査の目的、調査協

力、写真掲載等の許可(承諾書)を得ている。
また、アンケート調査に関しては無記名とし、
調査協力の有無による成績への影響がない
ことも文章と口頭で説明した。加えて、体験
実践をするにあたり、安全確保の観点から、
服装(スラックス、運動靴等)に関しても授業
内で指導し周知徹底した。



〔図 2〕

Ⅳ. 実践結果

体験実践後の感想と実践状況の写真を以下
に一部掲載する。

1) 各実践感想より

(1) 車椅子体験

① 2人1組で実施した場合…〔図1〕〔図2〕
車椅子に乗った学生…「縄跳びなどの小さな
段差でも衝撃を感じた。」「怖かった。」「
「マットの段差は結構痛かった。」「快適だ
った。」「段差だよ、と声をかけてもらう
と衝撃に対して心の準備ができて良かつ
た。」等、の感想があった。

車椅子を援助した学生…「意外と重かつ
た。」「段差で押すのが大変だった。」「曲が
る所が難しかった。」「身内の車椅子を押し
ているので慣れていた。」等、の感想が記
載されていた。

② 1人で乗った場合…〔図3〕〔図4〕〔図5〕

「マットの 3～4 cmの段差が越えられず大
変だった。」「怖かった。」「車椅子を押す手
が疲れた。」「ちょっとした段差でも大きな
衝撃を感じた。」「人に押してもらうより自
分で操作 した方がよい。」「人に押しても
らった方が楽だ。」「慣れたら楽しい。」「パ
ラリンピックで車椅子に乗って競技して
いる方は凄い。」等々、の感想がでていた。

<1人で操作した時の実践写真>



〔図 3〕

<2人1組での実践写真>



〔図 1〕



〔図 4〕



〔図 5〕



〔図 7〕

(2) 白杖体験

白杖体験は 2 人 1 組で実施…〔図 6〕〔図 7〕
〔図 8〕〔図 9〕

① 視覚障害者役をした学生からは…

「白杖を持っているので支えにはなるが、見えないことがとても怖くて不安であった。」

「援助してくれる友人を信頼していても、声の通りに足を出すのが怖かった。」「早めに声をかけてもらった方が行動しやすい。」「とても怖かった。」「毎日過ごしてよく知っている校舎内なのに、目を閉じて歩くとまったく知らない場所のようで怖かった。」「支えてもらっていてもゆっくりになかなか歩けなかった。」「特に段差が怖かった。」等の感想が多数聞かれた。

② 介助・援助者役をした学生からは…

援助した人は、「声をかけるタイミングが難しかった。」「どんな言葉がけがわかりやすいか言葉を選ぶのが大変だった。」等の感想がでた。



〔図 8〕

<白杖体験写真>



〔図 6〕



〔図 9〕

(3) 高齢者・聴覚障害疑似体験

① 高齢者疑似体験…[図 10][図 11][図 12][図 13]

a) 視覚シュミレーションゴーグル

(以下、視野狭窄体験と表記)「視覚シュミレーションゴーグルをかけると見える範囲が狭くて怖かった。」「歩くのに腰が引けてしまった。」等の感想があった。

b) 関節硬縮シュミレーター・チョッキ

(以下高齢者 重り体験と表記)「重りの入ったチョッキや関節硬縮シュミレーター・チョッキをつけると関節が曲がらず、早く歩けなかった。」「膝や腕が曲がらず、とても動きづらい。」等と話していた。

c) 杖

「杖は支えになって良い。」「スキー用のストックが2本ある方が歩きやすい。」「前かがみになった。」等の感想がでた。



[図 11]



[図 12]

② 聴覚障害疑似体験…[図 10][図 11][図 12][図 13]

「イヤードیفエンダーを付けたら水の中にいるみたいだった。」「プールで水が耳に入ったような状態になった。」「すっきりせず、モヤモヤした気分。」「音が遠くてよく聞き取れず、何度も聞くのが億劫になり諦めた。」等の意見があった。

<高齢者疑似(視野・聴覚)体験写真>



[図 10]

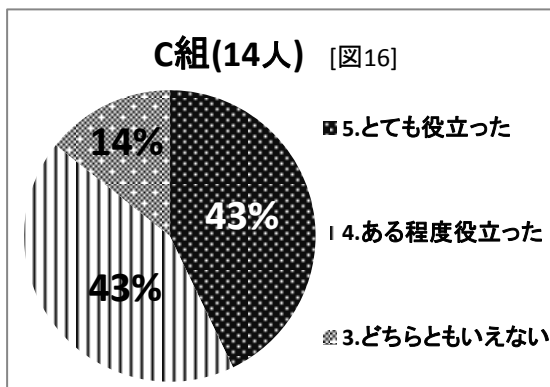
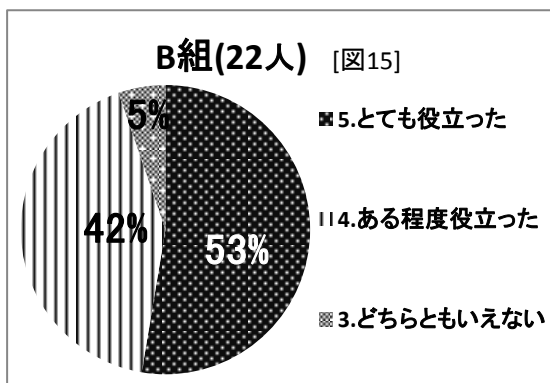
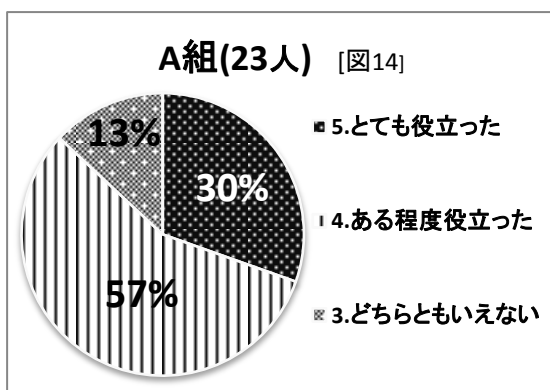


[図 13]

V. アンケート調査の結果

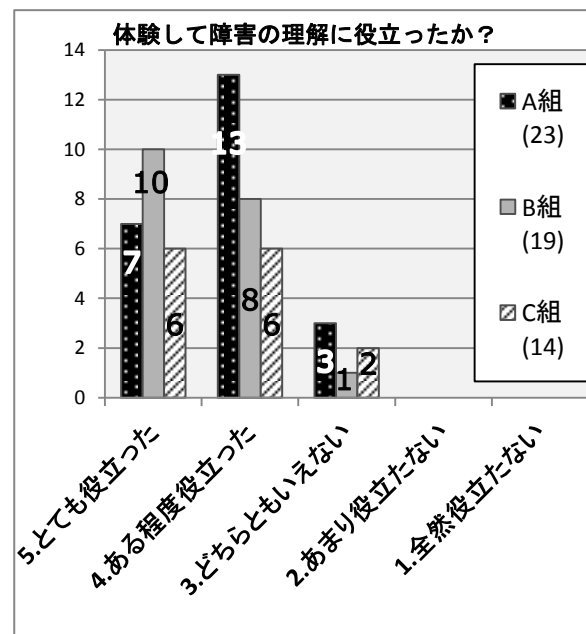
体験実習後、改めてアンケート調査を実施した所、以下のような結果となった。問1で本授業の目的・ねらいである「体験を通して障害理解にどの程度役に立ったか」について尋ねた所、以下[図14, 図15, 図16]のような結果がでた。図内の組の後の()内はアンケート調査時に出席していた学生の総数である。

問1「障害の理解に役に立った程度について」



「障害の理解」に5項目選択方式で尋ねた所、3クラスとも「2. あまり役立たない」「1. 全然役立たない」を選択した学生は一人もいなかった。反対に、「5. とても役立った」「4. ある程度役立った」と回答した学生を合計すると、8~9割を占めた。また、B組で「とても役立った」という回答が5割以上を占め、A組では「ある程度役立った」が5割以上を占めた。3クラス共に「どちらともいえない」と回答した学生が1割程度いた。その理由は、「すでに車椅子や白杖体験をしていたから」「戸外で体験したい」というものであった。

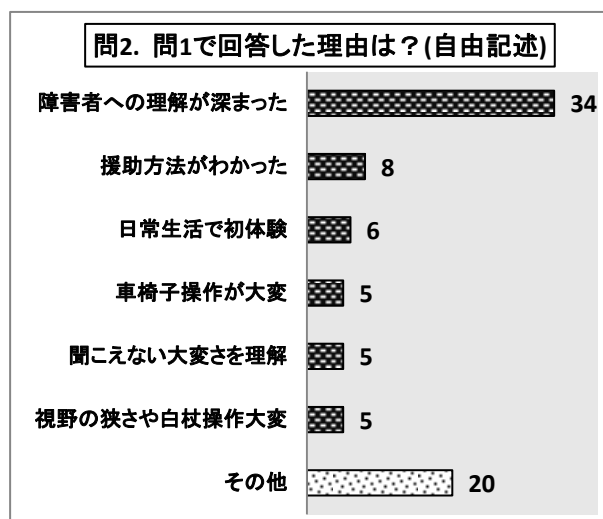
問1の結果を3クラス全体で棒グラフに表示したのが[図17]である。



[図17] 「問1の3クラス比較棒グラフ」

問2では、問1の回答理由に関して具体的な記述をしてもらい、KJ法でまとめた。一番多数を占めた回答は「障害児・者への理解が深まった」という事であった。具体的には「体験を通して、障害児・者や高齢者の負担や大変さ、気持ちがわかった」という記述が1番多かった。

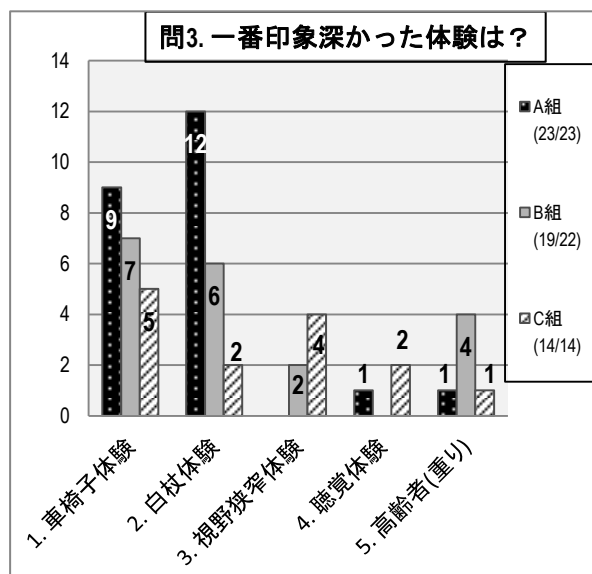
2 番目に多かったのが「援助方法がわかった」で問 2 の結果をまとめたものが[図 18]である。



[図 18]

また、問 2 の「その他」では「信頼関係の大切さがわかった(3 人)」、「怖かった(3 人)」、「障害のある方達が安心して外出・生活できる社会になってほしい(2 人)」、「勇気が必要(2 人)」「点字ブロックの上や前に立たない(2 人)」「屋上や戸外で体験したい(3 人)」等の意見もでていた。

問 3 では、一番印象深かった体験は何かを尋ねた所、[図 19]のような結果になった。



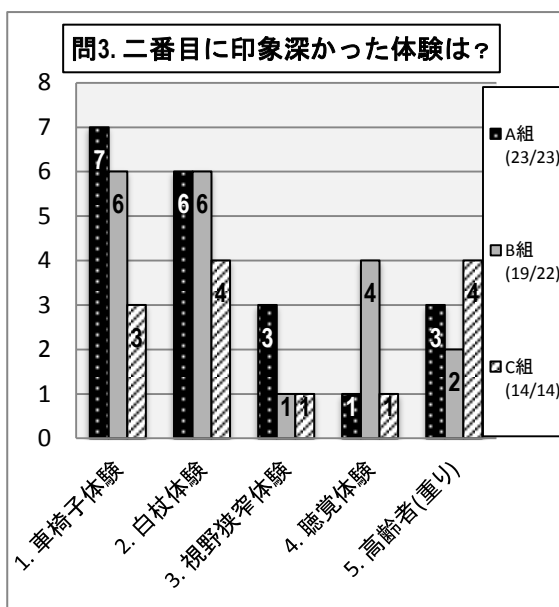
[図 19]

A 組では 1.白杖体験、2.車椅子体験の順に多く、3.視野狭窄体験をあげる学生はいなかった。

B 組は 1.車椅子体験、2.白杖体験、3.高齢者(重り)体験が多く、4.聴覚体験はいなかった。

C 組は 1.車椅子体験、2.視野狭窄体験、3.白杖体験と 4.聴覚体験が同数であった。

さらに、問 3 で 2 番目に印象深い体験を尋ねた所、[図 20]のような結果となった。



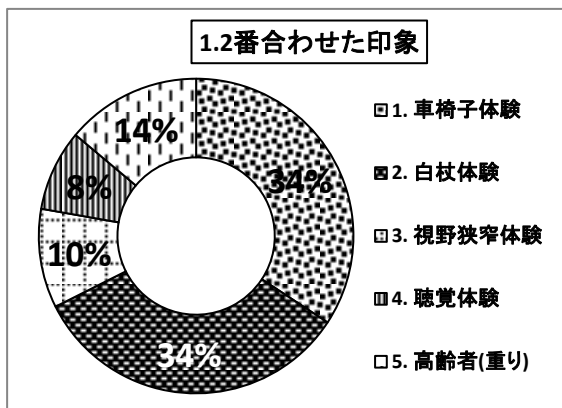
[図 20]

[図 20]により、二番目に印象深い体験は、

A 組が 1.車椅子体験、2.白杖体験、3.視野狭窄体験と 5.高齢者(重り)体験が同数であった。

B 組は、1.車椅子体験と 2.白杖体験が同数で、4.聴覚体験が 2 番目に多かった。

C 組では、2.白杖体験と 5.高齢者(重り)体験が同数で次に 1.車椅子体験が多いという結果がでた。次に、印象深い体験の 1.2 位を合わせて 3 クラス合同でまとめて表したのが[図 21]である。車椅子体験と白杖体験が同数で多く、2 番目に高齢者(重り)体験、3 番目に視野狭窄体験、4 番目に聴覚体験という順になった。

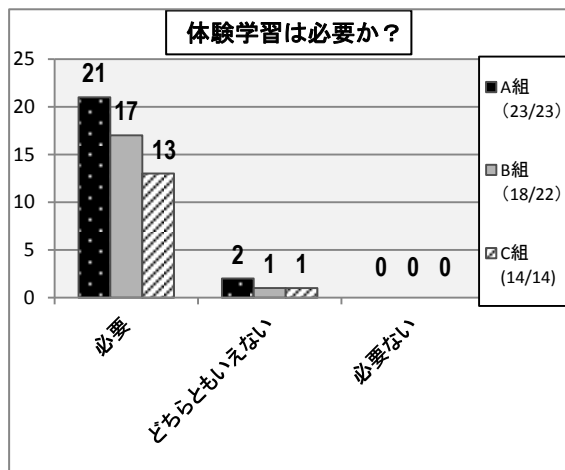


【図 21】 「印象深い 2 つの体験について」

【図 21】の結果から、「車椅子と白杖を利用したの身体移動や行動上の不自由さの体験が印象深かった」と回答した学生が多い事がわかる。また、同様の理由で高齢者(重り)が 2 番目に多い割合を占めたと考えられる。3 番目に視野狭窄体験、4 番目に聴覚体験という結果になった。

アンケート調査の問 5 で今回のような体験授業や DVD 視聴等が必要か 3 項目選択式で尋ねた所、【図 22】のような結果がでた。

(56 名中 1 名無回答)



【図 22】 問 5 「体験学習の必要性について」

9 割以上の学生が「体験学習は必要」と回答した。「体験学習は必要ない」と回答した学生は 3 クラス共に 1 人もいなかった。「どちらともいえない」と回答した学生は 1 割弱いた。

その理由は、3 名が無回答、1 名が「必要と思うが、正しいものでなければ無意味、間違ったことを覚えるならば不必要である」、また、「音を出さず対応方法をしたい、周囲がうるさいと発達障害の子どもに対応する場合は困る」という理由であった。今後、アンケート調査の意見を検討していきたい。

最後に、今回の体験授業を踏まえて、今後の授業への希望や意見を自由記述で記入してもらった結果が【表 1】である。

【表 1】 「体験学習の必要性と今後への希望」

内 容	人 数
実体験や視聴覚教材必要	18
困っている方を助けたい	7
大変さがわかった	7
気持ちを理解して寄り添う	2
恥ずかしがらず声掛けする	1
実際援助した	1
百聞は一見にしかず	1
正確な方法でなければ意味なし	1
音を出さない方法(白杖)	1
偏見があったがなくなった	1
障害者の家族の話を聞きたい	1
絵本や紙芝居で伝える	1
実体験を多くしてほしい	1

今回の体験授業や今後の授業に対する希望・意見には 8 割近くの学生の記述があった。【表 1】のように、今回の体験授業や DVD 視聴による視聴覚教材を希望する学生が 3 割以上いた。体験授業を通して「障害児・者の方々の生活上の大変さを理解し援助したい」、「障害の有無に関わらず困っている人を助けたい」、「恥ずかしがらず声掛けをする」、「偏見がなくなった」、「実際援助した」という意見があり、今回の体験授業をした意義を見出すことができた。

VI. まとめ

今回の体験授業とアンケート調査の結果から、今後も「障害児保育」の授業内で疑似体験等を実施していきたいと考えた。もちろん、知識の学習は必要であるが、実際に用具を使用することで疑似体験をし、障害児・者や高齢者等の大変さを理解する一助となったことは有意義であると思われる。上記したように、「障害に対する偏見がなくなった」「実際援助した」など、一人であっても学生の思考や行動にプラスの影響があった点は大変喜ばしい事である。体験授業を行うためには、用具や時間的制約等の観点から、今後さまざまな工夫が必要となる。調査結果を含め今後検討していきたいと思う。

VII. 今後の課題

今後の課題としては、調査結果から3点ほど検討が必要であると考えられる。まず1点目は体験方法について、2点目が体験場所に関してである。問1の「体験学習が役に立ったか？」という問いに[図17]の「どちらともいえない」という回答をした学生の意見として、「すでに車椅子・白杖体験をしたことがある」や「戸外や屋上で体験したい」、また、[表1]にあるように「正確な方法で体験しなければ意味がない」あるいは、「白杖体験は静かな環境での体験でなければ介助者の指示が聞き取れない」等、の体験場所と体験方法に対する意見があった。

1点目の「体験の正確な方法」について、体験授業の初めに各体験について用具の使用方法等について説明したが、車椅子・白杖と高齢者疑似体験とは教室が離れていたため、高齢者体験に関しては説明書を見ながらの実施となった。今後はできれば1クラスずつで体験実施するか、全員揃った所で全ての用具の使用方法を説明してから、各教室で実施する方法等も検

討したい。

2点目の体験場所については、「戸外や屋上」、白杖体験は「静かな環境で」との意見があった。数年前は学校周辺での実施していたようだが、近隣からの苦情があったと聞いている。天候や危険回避と安全確保の問題、また、近隣への配慮等を考慮すると戸外での実施は難しいように思われるが、屋上利用と共に前記した事項に関して教職員の方々と相談した上で検討したい。また、白杖利用に関しても「静かな環境」と「賑やかな環境」の両方の環境設定で体験実施できるよう今後検討していきたい。

最後に3点目として、本授業の目標である「障害理解」、「障害児・者理解」を深める為に、今後もできる限り体験やDVD等の視覚教材を活用していきたい。アンケート調査にあった「絵本や紙芝居」等も含め様々な演習を取り入れながら「障害児・者の大変さを理解し援助・支援する」ことを目標に、さらに、実践力をつけるような授業実施ができるよう考えていく。限られた授業時間内ではあるが、学生がさまざまな体験をとおして「障害児保育」の理解と実践力アップへの一助になるような授業実施ができるよう工夫していきたい。

VIII. おわりに

I. はじめにで記した様に、昨今の保育現場には「気になる子」や「支援、援助を必要とする子」が多く在園し、対応方法に苦慮している保育者の声を聞くようになった。将来保育者になる学生達が、「障害児保育」の授業をとおして「障害」、「障害児・者」の理解をし、子ども達を始め保護者支援、福祉施設の入所者の方々への保育や援助の一助となり、信頼される保育者になる事を切に願って、今後も授業改善に努めていきたいと考える。

謝辞

本実践報告を作成するにあたり、「障害児保育」の体験授業のために用具借用・写真撮影にご尽力下さった越谷保育専門学校の教職員の皆様、また、体験授業に参加し快くアンケート調査・写真掲載(写真掲載承諾書に署名捺印)に協力して下さいました学生さん方に、心より感謝申し上げます。

参考文献

1. 武藤安子・上原貴夫他編著 2006 『発達
の障害と支援の方法』 樹村房
2. ウィリアム・L・ヒューワード著 榊原洋
一他訳
2007 『特別支援教育 特別なニーズをもつ
子どもたちのために』 明石書店
3. 小野次朗・榊原洋一共著 2007 『教育現
場における障害理解マニュアル 障害とと
もに学ぶ』
朱鷺書房
4. ペギー・ハメッケン著 重富真一他訳
2008 『インクルージョン』 同成社
5. 是枝喜代治編著 2008 『特別支援教育に
役立つ
実践事例集 子どもの困り感に寄り添っ
て』 学習研究社
6. 藤永保著 2009 『「気になる子」にどう向
き合うか -子育ての曲がり角-』 フレー
ベル館
7. 石部元雄他編集 2009 『ノーマライゼー
ション時代における 障害学』 福村出版
8. 清水貞夫・藤本文明編集 2009 『キーワ
ードブック 障害児教育～特別支援教育
時代の基礎知識～』 クリエイツかもがわ
9. 藤永保監修 2012 『障害児保育—子ども
とともに成長する保育者を目指して』 萌
文書林
10. 渡部信一他編集 2014 『障害児保育[新
版]』 北大路書房
11. 柴崎正行編著 2015 『保育方法の基礎』
わかば社